



Title	メンデルスゾーンにおける演奏会用序曲の成立： 《静かな海と楽しい航海》と《美しきメルジーネの物語》を中心に
Author(s)	小石, かつら
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/49429">https://hdl.handle.net/11094/49429</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【46】

氏名	小石 かつら
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 22627 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	メンデルスゾーンにおける演奏会用序曲の成立—《静かな海と楽しい航海》と《美しきメルジーネの物語》を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 根岸 一美 (副査) 教授 藤田 治彦 准教授 伊東 信宏

## 論文内容の要旨

本論文はフェーリクス・メンデルスゾーン（1809-1847）が「演奏会用序曲 Concert-Ouverture」というジャンル名のもとに出版した4つの作品のうち、2つの作品を取り上げ、両作品の成立史を、作曲家としてのみならず、演奏家としても、また演奏会をマネジメントする「興行家」としても活躍していた彼の歩みの上に詳細に跡づけるとともに、楽曲分析を通じて両作品のそれぞれの改訂のプロセスを解明し、その意義を論じた研究である。全体はA4判 153頁から構成されており、そこにはライプツィヒ市立博物館所蔵の演奏会プログラムがコピーで示されているほか、ドイツ語で作成された、関連諸作品の制作進行に関するチャートや出版楽譜の値段の表が含まれており、さらに、引用されたドイツ語等の文献資料の原文が逐一脚注において掲示されている。

提出者は、まず「0. はじめに」において、「メンデルスゾーン、そして彼の〈演奏会用序曲〉に焦点をあて、その音楽をひもとくことは、フランス革命以降、市民が音楽受容の中心となっていくプロセスを探るための、きわめて重要なモーメントとなる」と述べて、本研究の基本的視点

を示し、先行諸研究を紹介するとともに、メンデルスゾーンのこれらの作品の改訂の詳細を探った本研究の独自性を強調している。続く「1. メンデルスゾーンの序曲と同時代での位置づけ」では、彼の全序曲作品ならびに交響曲の作曲活動の流れを総合的に概観した上で、メンデルスゾーンのみならず同時代の「序曲」が個々の演奏会においてどのような曲順のもとに取り上げられていたのかという問題や、楽譜出版の状況について、資料探索に基づく詳細な報告を行っている。「2. 《静かな海と楽しい航海》と《美しきメルジーネの物語》の成立過程」では、両作品の成立ならびに改訂のプロセスを、主として手紙等の資料によって詳細に跡づけている。「3. 《静かな海と楽しい航海》の改訂の詳細」ならびに「4. 《美しきメルジーネの物語》の1835年の改訂の詳細」は本論文の中心となる部分であり、楽譜資料全般の把握を出発点とし、初稿と改訂稿のそれぞれの楽曲構成を相互の関連を位置づけた図表によって示した上で、前者の作品については、「より多くの人に理解してもらい、広く受け入れられるための改訂であった」と述べ、また後者の作品についても、「各部分がコントラストをもって配置され、傾聴すべき興奮させる聴きどころと、心地よい部分とが併置されること」によって、「いっそう聴きやすくなっている」と述べて、改訂作業の背景に聴衆への顧慮があったことを示唆している。とはいえ、「改訂によって、調関係が整えられ、ソナタ形式はより強化されたとも言える」と述べて、作曲家としての自律的側面を見落としてはならないことにも言及している。

#### 論文審査の結果の要旨

本論文はメンデルスゾーンが「演奏会用序曲」として新たに創り上げた楽曲ジャンルに注目し、自筆稿、筆写稿、手紙等の基本資料を克明に探索することから作品の成立史を跡づけている。そのために必要なドイツ語資料の読解も十分に信頼できる成果となっている。また、改訂の具体的な作業を分析によって解明するにあたって作成された図式も、十分に考え抜かれ、かつ効果的なものとなっている。さらにこれらの作品の社会における位置づけを、楽譜の値段の観点から、交響曲の楽譜の値段や一般諸物価との比較を通じて裏付けている試みも、意義深い。2009年2月10日に行った公開口頭試問では、まず、主査がかかる評価を述べた後に、質疑応答に移った。ここでは、本研究が作曲と聴衆との関係をテーマとしている点でユニークであるものの、論文題目にそのことが投影されていないのは惜まれること、また、やはり全4曲を扱うことが望ましかったこと、「序曲」に比して「交響曲」を完成されたジャンルとして過大視している傾向が見られること、ターニングポイントとしての演奏会用序曲のジャンル形成の意義を音楽史のもっと大きな文脈で考察すべきであったこと、などの指摘がなされた。また「おわりに」は簡単にすぎ、メンデルスゾーンが「オペラ作品を手がける代わりに、単独でその雰囲気凝縮させた序曲に仕

上げ、それだけで全てを語ってしまった、と言えないだろうか」という捉え方は一面的にすぎるとの指摘もなされた。しかし、これらに対する解答はいずれも明快かつ率直に行われ、さらに、本論文が国内のみならず国際的学会においてもごく近い将来に発表することが可能なトピックを多数内在させていることもあわせて確認された。以上のことより、本論文を、博士（文学）の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。